

# 意識探究者D. H. ロレンス

——処女作「白孔雀」論——

大 川 浩

はじめに……「自伝的<sup>スケッチ</sup>寸描」を借りて

「白孔雀」はロレンスがノッテインガム大学在学中に書き始めたもので、小説としては処女作であり、ハイネマン社によって1911年、ロレンス25才の時に出版されたものだが、この出版の経緯は、彼が45才で、終生、悩まされた肺結核のため、没する一年前に書き残こした「自伝的<sup>スケッチ</sup>寸描」のなかで、精わしく述べられている。このなかでロレンスは「白孔雀」を“from the underground of my consciousness” —「意識の底から」— 五、六度、書き直したと語っている事は、ロレンスの作家として創作に対する意識態度の源泉をまさぐる意味で重大な意味を孕んでいるのだ。 とかくこの「自伝的<sup>スケッチ</sup>寸描」はなんの衒いもなく、至極あっさりと書かれているかのような錯覚感にすぐ人は落ち込みそうな気がするので、彼の父及び母の事、両親の出身階級の事、彼の学歴、文壇進水式の前後の事情、そして処女作「白孔雀」の出版の経緯までの前半の部分は自伝的スケッチという名称にふさわしいと言われながらも、後半に至って、急転直下、彼ロレンスが生涯、追求した肉体による生の意義、ヴァイタルでダイナミックな人間相互の結びつきの事に一転している事はテケレツなものとして自伝的スケッチの統一をくずしているとか、自伝的スケッチではないとか、階級的劣等感を終生、抱いてたとか、生涯の追求対象が失敗に終わった事を意味するのであるなどとまで極論するのにキュウキュウとしていて、彼が内なる力の尽に実は書いているのだが、批評家達は知性的意識の次元で意識的に偽の興奮作用を大脳に惹起して、ひからびた言葉で、自称、高みから判断し、判定を下して、きめつけているのであるが、

かかる断定的な言葉の裏に密そむ意識態度こそ、ロレンスが排斥してやまなかった事なのであるとはお気づきに全くなれない。所詮、批評とは批評するその人物とその限界を示すのみ。ロレンスの一語、一語を己の太陽神経業で感じた時に始めて、「意識の底から」という意味が強烈に迫ってくる。彼は過去四年間にわたって「意識の底から」腕き苦しんでいたのである。腕き苦しむといっても、意識の底に、自分の鳩尾で感じた事のみ書かんとしての意であって、虚像を実像らしくとか、偽りを真実らしくみせかけて読みごたえのあるフィクションを売文しようなどという意識態度からでは決してない。従って、その書き方も dash 式となるのだ。I would dash at it, do a bit ……という一見、書きなぐり式の粗雑な創作態度のように誤解されがちな手法だが、実にこの dash の仕方こそ、ロレンスが鳩尾で感じた事のみ書き記そうとしたからに他ならないのである。更に書き終った後でさへも、これを他人にみせ、称讃されても、それが自分の書きたかった事ではなかったと悟った時、再三、再四にわたって全部を書き直したのであった。

創作はロレンスにとっては、自分の鳩尾に落っこってきたものだけを書くものなのであり、この意味では、芸術は飽くまで自分一個のための芸術であって、観念的な文学使命観——文学は天からの授りものという神々しく、もったいぶった文学神授説や、やむにやまれぬ人間的義務観念に燃えた義務的文学論——は、彼にとっては、所詮、考える事も出来ない、全く無縁の観念であったのだ。創作の苦しみなどという観念的美辞秀句の底を割ってみれば、結局はネタ探がしの、さもしい作家のせつない心情がとぐろを巻いているのだ。ロレンスにとっては生みの苦しみは無かったのである。苦しくもがいたのは自分の意識の奥底から湧き起ったものに対する忠実さだけであり、鳩尾で受けとめた事のみ書かんとした苦悩だけだったのである。ここには虚構を実像らしく創り出すという詐欺的心情に対する恥かしげな姿勢もないのである。ロレンスにとっては、作品はまさしく接吻と同様、情熱の発露なのであった。そして情熱のおもむくままに、それを正確に表現する形式を見い出す事にむづかしさを感じて苦悩するのであった。たとえば彼が、今、小説を書いている。ところが一向にその小説の実体が掴かめないので。いまいましい事には145ページまで書いたのに、この小説の主題がはっきりしないという訳だ。自分を抑える事の出来ない彼の内なる力にまさ

しく屈服して、身内に蠢くものを吐き出した稀有の人なのだ。従って書きたければ書くし、書きたくなければ書かないし、又、一旦、書きあがったものでも幾度となく書きかえたのである。「チャタレイ夫人の恋人」の原稿が三稿あると言う話だがこの「白孔雀」も同様に、数度にわたって書き直されているのであり、又、「白孔雀」というタイトルも、始めは *Nethermere* というタイトルであったなどと言われるが、いづれにせよ、私にとっての「白孔雀」は最終的に書き直された「白孔雀」こそロレンスの「意識の底から」湧きおこったものをえがいたものであり、第一稿、第二稿での遂次、テーマの変遷を探ぐるのは単なる知識の次元であり、自己満足でしかない。作品が変遷したのは書きたい事ではなかったと意識の底で気付いたからこそ書き改めたのであって、彼ロレンスが太陽神経叢作家であったからに他ならないのだ。その様な比較検討をする意識こそペダンテックな姿勢以外の何物でもないし、*Nethermere* であろうとなかろうと、私にとっては「白孔雀」の存在は微動だにしないのである。

さて、この「白孔雀」だが、処女作という興味深さは、作家の瑞々しい魂が如何なる成長を培ちかっていったかという意味で、後期の作品との関連において興味あるのだが、創作の終生一貫した姿勢とあいまって、この「白孔雀」はロレンスの魂の軌道が、この作のなかで、すでに設定されているという意味で重要な作品である。「白孔雀」のなかで、すでにロレンスの一生を賭けた男と女の自我の有機的結合への探究の軌道が、もろに処女作のなかにぶちこまれているのである。

生涯を自我同志の孤立、融合という問題に悩まされたロレンスの処女作では男の自我と女の自我が結局は非有機的結合に終わってしまった悲劇となっており、ロレンスのいわゆる哲学大系からは勿論、未完成のものであるが、未完成であるだけに後に体系化される彼のいわば人間哲学の原形核が包含されているのである。

### 本論……有機的結合への探究

「白孔雀」は嫌悪感を催させる素晴らしい感動的な作品だ。女の虚栄心が発かれている。登場する人物は夫々が、なんといやらしく、おぞましい人物である事か——観念的で知的で、ペダンテックで自分を高く売りつけようとする自我の固まりのような女レテイも、自分を生かしきれなかった、同情すべき農夫ヂ

ジョージも、ましてや、都会的で教養あり繊細な、炭坑主の息子レズリィも、そして後にジョージと結婚するメグのすべてを我が物とする貧欲さも、全く、吐き気が催される。嫌悪したくなる作品だ。なぜ嫌悪感を催されるのか——彼ロレンスの書いている事が真実だからだ。人間の観念の奥底に密そんでいる醜悪な自我を発しているからだ。しかも、スラスラとあっさりこんと他目には発しているだけに恐ろしく、おぞましく思うのである。発いてはならないものを、あっさり発ききっているのだ。発く背後にはロレンスの一生の哲学とも言える命題——人と人との有機的な結合を探究する透徹しきった情熱——がある。発かれた嫌悪感とおぞましさが、見事に発いてくれたという感嘆さとあいまって驚嘆してしまう作品となっている。しかも二十二、三才の作だと言う。その上、これが彼ロレンスの処女作なのだから恐ろしい。さらにその上、恐ろしいのは、すらすらと我々の心の底に淀む醜悪なものを見事、あばいて画がいている事だ。

「白孔雀」の第一部では、知的ペダンテックで、常識的次元では猫や兎といったペットに対しては同情をするが、人間にはペットに示す同情さの代わりに、猫が鼠をなぶる式の残酷さを意識的に示す女レテイを中心に、この自我の強い女に引きずられて行く農夫ジョージと、浅薄で、尊大で、凡俗な都会人、炭坑の持主の小忤レズリィとの三角関係が抒情的な田園を背景として展開される。左からは恋され、反撥され、右からは慕われ、口説かれる、この三角関係の中心者レテイは、小説の語り手シビルの妹だが、どうにも鼻持ちならない強慢さと知的優越感の溢れる女なのだ。農場に仕掛けた罠に間違えてかかって死を待つ猫は、河のなかに投げこんで、苦痛を少しでも早く減じてやるジョージの態度を田舎的野蛮人、洗練されていない人間、知性の欠如を思わせる人間とレテイはきめつけ、心底ではジョージが好きなのだが、ジョージの属性がどうしても耐まらない。

「全く嫌んなっちゃうわ。私がピアノを弾きながら、彼に音楽の事を聞いたって、馬鹿みたいに彼ったらポカンと口を開けて、私の手をみつめている許りで、揚げ句の果てには、君の手はきれいだねなんて言うのよ……そりゃほめられるのは満更じゃないけど……でもねエー」式の女なのだ。「それにレズリィたら……私、なんにも彼に感じないんだけど……。私の事をしつこいくらい好きだと言うのよ。そりゃジョージとくらべたら、デリカシイに富んでいるし、洗練されてい

るし、教育もあるし、マナーもすてきよ。それに……どうでもいいけど……お金持ちだし。お父さんは炭坑の重役でしょう。お母さんは教会じゃいつも滋善パーティーの金主で中心人物よ。矢張り、育ちが違うのね。」という訳。かくしてレティにとっての to be or not to be- 愛情を感じて、なんとなく心ひかれる、粗野で、これといった学歴もないジョージと結婚すべきか、はたまた、なんにも感じないけれど、彼の方から好きだといってダニみたいにいつもくっつき回っている、知性あり（どの程度の知性かは別として）教養あり、繊細な、そして近い将来、このあたり一帯の炭坑主となるレズリィと結婚すべきか——という、自分を高く売りつけようとする、さもなく、強慢で我の強い女となってジョージとレズリィの恋のさやあてを楽しむのである。ジョージにとっては、毘にかかった猫は河の中に沈めてやるのが畜生道なのであり、畠を荒らす兎は耳の長い、赤い目をし、白い衣をきた愛らしいロマンテックな存在では決してなく、只、ひたすらに追いかけ廻わして、引っ捕え、首をねじってやる存在なのである。知識の段階で、即ち教養としての段階で音楽をたしなみ、素晴らしい音楽、立派な音楽家と定評づけられたものに自分も参与し、語り、喋るという次元で恍惚となって、感動までが偽物となって、精神の使い走りになってしまっている次元で音楽をたしなむレティとちがって、ジョージはベートヴェンやシューベルトのような交響曲を楽しむ事は腹の底から出来ず、相馬馬子歌のように素朴な感動を誘う音楽の方がずっといいのである。レティのジョージ・クロウセンに関する抽象的で学術的な絵画論の前では、ジョージはただ口をパカッとあけ、彼女の美しい唇から、淀みなく発射される虚しい言葉の一斉射撃を浴びているが、実のところ、Greiffen Hagen の *Idyll* の絵をみて、じっと長い間、言葉にもならず、感動しているのである。どんなにレティからシューベルトがよく、チャイコフスキーが素晴らしく、クロウセンがいいという絵画史上の定説を観念的に再三、再四、たたきこまれても、ジョージには、自分の鳩尾で感じた素晴らしい絵の方がずっといいのである。レティは定説を疑う事をしないし、また、出来ない人という意味で、文字通り知識人なのである。ベートヴェンやシューベルトの偉大な音楽やクロウセンの絵画の素晴らしさを自分は本当に感じているのかなどとは露一つ疑う事をせず、過去から現在までの評価を繰り返して鸚鵡的知識を被露

して、ジョージをいじめる快感に没入しているのである。決して懐疑的になれず自己を疑う事のない擬装知識に恍惚としている女がレテイなのである。結局、レテイとジョージは全く異質の世界に所属しているのである。対するにレズリィは生まれの良さと教養と財産家の息子というmammonの属性の上に、浅薄で尊大な青年であり、洗練された会話をし、テーブル・マナーもよく、育ちのよさを発揮する都会的な青年。テニスが出来ても、月光の眩く輝く森ではポルカを踊る事は出来ないのである。この二人の青年を手玉にとって、自由自在に操って、ある時はちよっと喜ばしたり、又、ある時は絶望感に落とし入れて、自分をどちら側に高く売りつけるか、その値段を競りあわしている女がレテイなのである。ジョージを常に知的劣等感におとし入れレズリィに対してはジョージへの愛情をひけらかして、ますます嫉妬の焰をいやましに燃えさせたのだ。いわば生殺与奪権を握っている観念的な女なのである。そしてなおおぞましいことには、この女は美しく優しいときている。クリスマスの翌日、レテイが成人式を祝う日にジョージに、これみよがしとばかり、レズリィから貰った指環をみせつけて、ジョージの心を騷り、わざとらしくレズリィにしなだれかかったりして、ジョージに指環についての感想を強要して、自分の意志を押しつけるのである。悪い事は重なる——父が亡くなって、ちよっとした財産の遺贈を受けたことによって、本来の押つけがましい態度に、知的優越感をもった所へ、さらに財産を持った事によって、強慢で侮辱的となり、ちよっとやそっとの事では心、楽しめない人間となった事であった。成人の祝日を境に、ジョージの心の叫びも、レテイは封じてしまい自分の心の真実の振動にも目を向けず、ジョージが、あからさまに二人の心に潜在している共通の感情を語ろうとする時「黙って」と命じてしまった事から、ジョージもレテイも異った、だが墮落という意味では同一の軌道を夫々、反対側から歩み始める事になってしまうのである。

第二部一章で、レテイがレズリィと一諸に散歩のついでに取って来た待雪草をジョージは、一瞥もせず、テーブルから落ちた花をレテイが「可哀そうに」とつぶやいた時、ジョージが君は優さしいんだねと皮肉った事から、レテイの自尊心がうちのめされ、口惜しさのあまり、涙をこらえて帰宅する事件が二人を夫々、孤立の存在へと追いやる契機になってしまう。この日からジョージは肉感的な

従妹のメグへと傾斜し、レテイもレズリィと今迄以上に親密になってレズリィに服従的な姿勢——諦めと、二者選一の動揺から抜け出たまやかしのやすらぎの姿勢——を示して屈伏してゆく。しかしながらジョージとレテイの心の意識の底に共通して蠢めく余韻はこれからも長く尾をひいて、時には激しく燃えあがり、時には諦めの形で燃え燻ぶってゆくのだ。この後、レテイがレズリィとの結婚式の準備の買物をして帰宅した日にジョージが森の中に来て貫って心の底にあるものをぶちまけるも、すでにレテイの身の廻りに張りめぐらされた強靱な蜘蛛の網をレズリィは破る気もなく決裂してしまう。たまたま、そこへレズリィが不安気に近づいて来て、二人一諸に帰るも心の動揺をかき消すレテイのピアノを止めるようにと言うレズリィの言葉も無視してしまい、ために二人の間に冷たい焦りと不安と危惧の空気が忍び寄る。激怒したレズリィが数日間、レテイの家を訪ねる事をせず、互いに苛立ちのまま数日間を過ごした後、結局はレズリィが狂気のように埃をかぶって、炭坑から車を運転して来たので、不安に嘖まれていたレテイも狂喜し、母の冷静な拒否の態度も無視してレズリィを一泊させてしまう。(不安にせめ嘖まれている心情を埃とか不休不眠で炭坑から車を飛ばしてきた外形で表現しようとしたレズリィの俗っぽい気取の感傷の臭気が紛々とおおう。)

全くお目出たい事には翌朝、レズリィは晴れ晴れとした表情をしている。ヤレヤレ、なんってこった。一泊して何の自覚的な親密感も、愛のやさしさも無い尽、狂おしい官能の蠢きをぶっつけて、肉体を征服するともうレズリィは愛の絆で結ばれたと思い、自信に満ち溢れてしまうのだ。ジョージから彼女を引き離し、レテイを己が所有物として、合一を願うため、さぐり合ったり、離れたり、くっついたり、贈り物の帳りをめぐらかして、一步一步自分の確固とした所有物と化し、独占欲をみたしていき、肉交という点で、すっかりこの事が成就されたと思い満足げな微笑を漂よわせ始めるのである。レズリィのかかる浅薄な満足感、皮相的な充足感と裏腹にレテイは虚脱と屈辱感のみが体内に疼いているのである。何の充足感もないし、あるものは白々しい虚しさのみ。離れている不安と危惧をうち消すための打算的な献身行為が、狂おしい交わりとなってしまったのであるから歓こびも、しっとりとした落ち着いた愛のやすらぎなどはある筈が無い。寒むざむとしたものだけが彼女の肉体の奥底にしのみこむ。このため

レズリィの突然の自動車事故による入院最中にレテイが二人の結婚にためらいをみせても、おめでたいほど自信をつけたレズリィは、レテイの奥底の気持ちを推察してやる事が出来ないほど自意識が過剰になってしまっている。一旦は、自分の肉体の奥底に潜む不可知な存在によって、彼女の今迄での知性的意識が十字架にかけられ始めて、素直な心でジョージの事を考えるもレテイは自分の意識態度の微好な変遷にも気をつけず、再び小賢かしく手練手管を弄して、ジョージを誘うも、彼はその誘いにのる技がわからないまま、からみ合いそうになった網の目から二人はこぼれ落ちて、全く断絶して、夫々、ジョージはメグとレテイもレズリィと結婚する事になってしまうのである。かくして二組の夫婦が立派に出来あがり、同一円周を逆の方向から走り出して男と女の自我の非有機的な結合という悲劇の軌道へ突入して行く事になる。

レテイと異なって、メグは自分の意志を強引に押しついたり、ジョージをして知的劣等感に落とし入れる事もなく、安らぎと憩を与える意味で、当初はジョージは幸福そうであった。ジョージが大地と彼が有機的に結合していたその基盤である農場を捨てて、馬の仲買人として成功し出し、居酒屋も繁盛するようになるにつれて、メグはジョージのすべてを貧欲に欲求し出し、そのうち子供が生まれると、子供に専念し、さらには叔母の死亡により遺産を相続してからというもの、夫と妻の間にもやもやが生じてくる。即ちメグは子供と財産に全く寄りかかってもう妻という座の安全地帯に逃げきってしまったという意識態度になってしまった事から惹起されるもやもやなのだ。ジョージはこの孤独を社会主義者の間で癒し、自らも社会主義を勉強し出し、ウェルズやショオを続む様になって、抽象的な生を営み始める。だが所詮、観念的な主義、主張という不毛の真空に生きるのに飽き出し、以後、妻や子供から、その存在を無視され、家庭のなかで全く遊離し、酒に溺れ出し、遂には震頭性譫妄症にかかり、廃人同様の生ける屍になってしまうのである。

かたやレズリィは恋いこがれたレテイを首尾よく手中に収さめ、彼女が予期した通り、炭坑の所有者となり、社会的存在としては州議員から、保守党の国会議員となって、しばしば新聞に名前が載るようになり、レテイとの関係においては一見、礼儀正しく、注意深く、服従的態度を維持し続けて人格存在と化してし



まう。人格平面上においては一般に人は親しみ深いのであるが、有機的で、ヴァイタルな結びつきは望む技もない。大脳で社会的に考えて、互いに接触し、人格と人格との間をたくみにすり抜けて摩擦を起こさず、しかも、うまく立ち廻って排他的に生きて行く存在となった夫とレテイも調子を合わせて夫の国会議員の選挙運動に加担して、実は社会的存在としての夫婦という共犯意識を土台にして、自宅で盛大なパーティを催して、立派にホステス役をこなす。だが満たされるものがないのだ。人格存在と化した人間相互の間には、直観的意識の暖流が通よいあうすべは皆無である。従って彼女は心のなかで何か虚しい。その虚しさを子供で充たす様になる——神に服従する奴隷のように。子供という理想——子供を育てるのが自分の理想という観念を抱いてしまうのだ。神を己の大脳に抱いてしまってこの神に服従してしまう。この様にレズリィとレテイも全く社会的存在となり果ててしまうのである。ある意味では、ジョージの様に酒乱家にもなれないのでレテイの立場は一層、悲劇的だ。酒乱家になる必然を意識できずに立派な妻、良き母、賢いホステス役を勤めあげる意識になる。理想を抱いてしまうのだ。するとその理想にのみ汲々として、その理想を追求する実際の次元ではずっと低次元になってしまう。底を割れば己の保身となってしまうのに気がつかない。子供に寄りかかって己がのびる努力を放棄して、自己犠牲という観念に陶醉してしまうのだ。

この二組の夫婦に共通して言える事は、いずれもが夫と妻の間が有機的な結合が無いという意味で悲劇的であるという事だ。夫と妻の間に、後にロレンスが完成する孤立と融合という愛の哲学が無いという事がそうさせている。メグはジョージのすべてを欲求する。本など読んでいないで、自分に語りかけて欲しい式の貧欲な独占欲に根ざしたエゴイステックな欲求がある。べったりとくっついた途端に互いに排他的な自意識が出てくる。夫と妻の間でさえも、相互に侵さず倒さず均衡を保持する姿勢こそが互いを生かす事になるのである。レテイは意識態度において、すでに当初から、夫に対する愛情は孤立的だ。男と女の結びつきを肉体を通し血液で思考せずに、大脳意識で考えたからに他ならない。孤立の土台には自分が肉体として存在している事実、そしてジョージに対する彼女の肉の深奥で蠢めくものを意識的に排除して夫の人格とか家柄とか財産とか社会

的地位というmammonの属性を頭で考えて結婚した意識態度が存在する。大脳意識で結ばれた結婚であって、決して極究的自我同志の結合ではないからこそ、夫々が最初から all or nothing 式のものとなってしまうのであり、all も nothing も所詮、共に貧欲の変形でしかないのである。更に両者に共通した、その悲劇を深めている要因に、財産、階級、観念、子供という共通分母がある。ジョージでさえもが馬の仲介人として財をなし、妻のメグも遺産を相続した事によって、階級が移行したかのような錯覚感に落ち入って、雇人達に対して優越感を持つようになり、支配者然としてくるようになり、財産家という事を背景にメグも殊勝に教会に通うような意識態度に変容していき、自分の財産をもったという意識が互いの財産を浸食しない様にと金銭出納帳をつけ出す始末となる。レテイも結婚前に父の死亡によって、僅かばかりの遺産贈与を受けた事から、彼女の心の中に微妙な意識態度——強慢、軽蔑的姿勢——をみせ始めレズリィに傾斜する姿勢を示してしまう。そして男は——ジョージもレズリィも——社会主義とか保守主義とかに殉じて、自分の内なるものの発展への姿勢を忘れ出し、主義を中心として集团的に思考し、集团的に行動し自動的、機械的な社会的存在となって墮落するのだ。観念に支配されてしまう結果になる。観念を呼吸して、充足感にカッカとしているが、実の所、自分の内面の生き方には、こればかりも目を向けていない。観念でまやかしてしまって、世界平和、自由、平等という理想に憑りつかれ、大地に足がついていない事になる。肉体によって生きている事実には目をつぶって真空地帯で生きていると錯覚してしまっているのである。およそ理想をもつ事は人間を人間たらしめて生活させる根源的な直観と本能を萎縮させ、人間を生ける屍として抹殺し、自動的、機械的、ひいては人間を無力化させる悪であり、忌わしい病菌であり、特にその理想が支配的な位置をしめるに至っては極悪なものになるのだ。夫の玩具が政治という、主義という、他人を傷つける意識の玩具であるならば、妻の玩具は子供である。レテイもメグも子供を生んで、簡単に夫の愛の本体などはいとも容易に放棄してしまうのである。妻は子供の養育にかこつけて自己の成長する姿勢から目をそむけて、子供に託して、子供の奴隷となって奉仕する結果、self を喪失してしまい、自分の人生を二次的なものとして生きて、自分の可能性を他の器に移し入れてしまう

のである。 子供のためというこの殊勝な自己犠牲の背後には自己を発展させる責任から逃がれようとする女の狡猾な知恵があり、見事な自己放棄がある。 なぜなら自分自身の人生をよりよく生きるためには、自意識とmammonのみによって、排他的に生ける屍となって生活を営んでいる現代文明のなかにある人間とは離別して俊厳な孤高を保持する事が必要となるのだが、彼女にはかかる孤高を維持しえないのだ。 このため、容易な自己犠牲という観念のなかに自分を埋没させてしまい、自分自身の肉体の生活から背を向けて自分をはぐらかしてしまうのである。

これら二組の夫婦間には、最初から、そして、又、夫婦を営む過程においても、共通した悲劇的要因が存在し、この要因に幻惑され、ジョージとメグ、レズリィとレテイが、夫々、異なった方向ではあるが、同一の円周を逆に歩み出してしまうのである。 ジョージとメグは円周を左側から歩み始めて、金、階級、主義、子供という円周を跡どって最後には酒乱者という悲劇で終わり、片やレズリィとレテイは円周を右側から歩み出して、ますます富み、社会的名声をはくし、階級基盤を確立し、名士となって、政治家となり、全く社会的存在となって墮落する非有機的結合をたどるのである。 孤立と融合が *tenderness* を軸として同一の次元で回転せず、まやかしの附属物——金、階級、観念、子供——にとらわれては男と女、夫と妻の間の溝はますます深まってしまう事になり、非有機的な結合にならざるを得ないのである。 そして一見、この二組の夫と妻は、外面的には男が女の強烈な自我によって滅され墮落させられている感もするが、問題は優劣の明示にあるのではなく、寧ろ優劣を惹起した実相の奥底にある男の自我と女の自我の中核をなす意識領域を究明した所にロレンスの意図がうかがわれるのである。 いづれが勝ち、いづれが負けようが悲劇である事には変わりはないのであり、男と女がどちらが勝者で、どちらが犠牲者かなどという優超とか、憎悪の次元での小説ではないのであって、男女夫々の優超、劣等という立体上の問題ではなく、男の自我と女の自我が同一の平面で、なぜ有機的結合にならずに悲劇となったかと、いわば、ロレンスの「炭素論」に根ざした男女の自我のおぞましさを発いた作なのである。

## むすび——探究ルート of 敷設

「白孔雀」はロレンスが25才の時、母の死後二ヶ月後に出版されたが「自伝的寸描」<sup>スケッチ</sup>のなかで、彼は「白孔雀」の出版は自分にとっては最早、何の意味もなかったと述べている。なぜ無意味なのか。ロレンスは「意識の底から」この作品のなかへ、自分のすべてを投入したからに他ならないのだ。自分の胸のつかえをこの「白孔雀」のなかへ吐き捨ててしまったからであり、自分の感情を作品のなかで、再現して、これを克服してしまっただけからに他ならない。この「白孔雀」の次に自分の胸のつかえを吐き出した作品が「息子と恋人」であるが、この作が母親のすぎまじい抱擁からの脱出に始まる彼の作家魂の歩みの第一歩だとすれば「白孔雀」はその脱出の予備行為なのであった。意識の探究者としての研ぎすまされた彼の作家魂がレテイといい、メグといい、子供のために二次的生存にしかなり得なかった事を「白孔雀」のなかで画がいた時に、彼女らと子供の関係は母と自分との関係も、これと全く同じであると悟らない訳はない。彼は絵空事を画いたのではない。太陽神経叢で受けとめた事を吐き出す様にして書いたロレンスが自分に対する母親の貢献を、子供に対するレテイとメグの器のなかへ移し入れたに過ぎないのだ。この意味でも「意識の底から」もがいて書きなぐった「白孔雀」から彼は解脱の第一歩を踏み出したと言えるようである。

この「白孔雀」のどこにでもロレンスは存在する。ロレンスが意識の底でうけとめ、自己表現という衝動から「白孔雀」というタイトルで開花したなかには彼ロレンスが神秘的で非合理的な、内なる力の源泉から湧き出たものだけを吐き出したのである。従ってロレンスは作中の至たる所にもいるのであり、自分の周囲の人々——父や母、女友達——も、周囲の自然——農場、炭坑、更には月や太陽まで——も、そして周囲の生き物も、作中に画かれているのである。作中の語り手、シシルのみがロレンスでは決してないのだ。「白孔雀」のなかに登場するサクストーン家はチェインバー家にあたり、エミリーはジェシーであり、私シシルがロレンス自身であり、シシルとエミリの関係はロレンスとジェシーの関係であるとロレンスの系図を探ぐる事も、ロレンスが実在の人間はともかくも架空の人物を構成する事は拙ないと指摘したり、性格描写はうまくないときめつけ

るのが私にはトンと合点がいかない。白孔雀とは獵園の番人アナベルによって語られた、レテイよりもなお存在の影の薄い女であるクリスベルに与えられた名であるという様な事が一体、「白孔雀」の本質とどうかかり合っているのだろうか。白孔雀はこの作中のレテイもその一羽であり、同類なのである——自分の意志を他人に強引に押しつける観念的知性の人間としての白孔雀。作中において母のピアズリ夫人は余り正面に出て来ないし、父親も第一部でちよっと顔を出し、すぐ死なせてしまっているのは事実だが、この事から学者達が言っている様に父への嫌悪感をどうして感じとられるのだろうか。敢えてこじつければ自分の生命を燃焼させる事も出来ずに不発のままに終わり、酒に溺れていったジョージは他ならぬ父のもう一つの分身ではないだろうか。更には父をすぐ作の中から扶殺した事によってレテイに遺産を相続させて、彼女の性格をいやしく変えさせる——物によって人間がどう変化してゆくか——意図ではないかと考えられるのである。ロレンスを彼以前の古典的文学批評の基準、普遍的文学通念——で判断すると、とかく小説の技法、構成、人物描写という意識的な知性で抽象的な枠を押しつけた形でしか判断できなくなってしまうのであり、所詮、観念的でペダンテックな批評家の得意気なポーズでしかない。ロレンスの内なる力は彼をして、どこからみても燦然と輝くなんカラットもする光沢まばゆいダイヤモンド的な完璧な枠にはめこまれた作を書く事ではなく、ダイヤモンドに等しく共通する原素は炭素であり、この炭素をえがいたのが彼の作品なのであり、彼の意図したものであった。ダイヤモンドをダイヤモンドとみだてている従来の文学批評のカテゴリーにはおよそあてはまらない。孤絶した凄まじい嘔吐物を吐き出す事に彼の作家魂がむけられたのであり、この処女作で、すでにロレンスは作家としての創作の姿勢という根源的なものの在り方を把握し、内なる力にのみ忠実にならんとする姿勢を確立し、いわゆる哲学的大系からは未完成ながら、今後、一生を通じて追求される男と女、人間と人間との自我の有機的な結合というテーマが「炭素」の次元で追求されるのである。「白孔雀」のなかで肉体の奥底に蠢めく不可知なものに目をつぶり、大脳意識で結婚を考え、金銭とか社会的地位とか mammon の奴隷となって生きたり、理想に憑りつかれ、自己犠牲という観念にまやかして生を扶殺して、肉体によって生きる事を避けてしまっている所に非

有機的な結合の原因を探究したのだ。この一作で、すでにロレンスは今後の前進する軌道にその第一歩を踏み出したと言えるのである。有機的な結合を妨げているものが人間の意識であり、肉体によって生きる事を恐怖し、嫌悪し、知性意識、大脳意識で生き、結果的には生ける屍となって、人格存在と化し、mammonやその属性によって人間が甲冑を帯びて更に高みに登りつめようとする醜悪な、排他的になっている事実につきあたる。そして「白孔雀」のなかで、この事実から男と女の間恋愛も二組の結婚生活も非有機的なものになったのである事を探究したのである。それでは人間相互の有機的結合の要因は何か。そして人間が人間として生きるという文字通りの意味で生きるとはどういう事か。どのような生き方が生きたと言えるのか。何を信じ何とかかりあって生きるのか、という課題へ目が向けられていく事になって、人間の意識の奥底にある不可知なものの存在への探究が行なわれる事になるのである。肉体によって生きる事は経験の問題だ。そのためには肉体を危険にさらさなければならない。未完を完成させるためには次々と冒険し、吐いていかななければならない。その吐気を催させたものがメグやレテイの子供に対する自己犠牲という姿を母親の自分に対する関係に投映させて、虚脱と惨敗に終ろうとも、自らの肉体をもって敢然と新しい意識領域へと船出したのが次の「息子と恋人」となって吐き出さるのであり、その限りにおいては「白孔雀」はまさしくロレンスの人間相互の索引作用の探究の軌道の原点なのである。